

平成 27 年度

協働のまちづくり大賞
事例集

平成 28 年 9 月

目 次

協働のまちづくり大賞について・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

27年度 受賞事例

【協働のまちづくり大賞】

○ “人間” 育み地域に潤いと輝きを回復する元気発信活動（木佐上コミュニティー） 2

【優秀賞】

○子どもがつなぐ町内会ふれあい広場（上野丘1丁目町内会）・・・・・・・・ 4

○「みんなでわいわいまちづくり」（NPO法人わいわい夢クラブ）・・・・ 6

○減災のまちづくりをめざして（城南南町防災会）・・・・・・・・・・・・ 8

○各種団体と協働で安心安全な地域づくり（松岡校区自治会連絡協議会） 10

○賀来校区かた昼消防団（賀来校区かた昼消防団）・・・・・・・・・・・・ 12

○高齢化を幸齢・長寿の街に（ふじが丘東区自治会）・・・・・・・・・・・・ 14

【奨励賞】

○自主財源の確保でコミュニティ活性化を図ろう（真萱自治会）・・・・ 16

○上宗方子ども見守りボランティア（上宗方自治会）・・・・・・・・・・・・ 18

○環境美化活動（月・木隊）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

協働のまちづくり大賞について

協働のまちづくり大賞は、市民の皆さまに、市内でどのような自治会活動が行われているかを知っていただき、まちづくりの参考にしてみたい、自治会の更なる活性化につなげていただきたいという思いから、平成23年度に創設されました。

平成27年度は「世代間交流」・「コミュニティの活性化」・「安心安全のまちづくり」・「青少年健全育成」・「地域福祉向上」・「日本一きれいなまちづくり」の6つのテーマを設けて募集を行い、10団体の皆様から応募をいただいたところです。

この度、平成27年度に応募のあった全ての活動事例をまとめた事例集を作成いたしました。

この事例集が、今後のまちづくりの参考となるだけでなく、今まで自治会活動に関心のなかった人たちにも自治会活動を知っていただき、関心を持

つきっかけになればと考えております。

【世代間交流】

上野丘1丁目町内会
(大分中央地区 金池校区)
NPO法人わいわい夢クラブ
(大分東部地区 東大分校区)

【コミュニティの活性化】

真萱自治会
(鶴崎地区 松岡校区)
木佐上コミュニティ
(佐賀関地区 木佐上校区)

【安心安全のまちづくり】

城南南町防災会
(南大分地区 城南校区)
松岡校区自治会連絡協議会
(鶴崎地区 松岡校区)

上宗方自治会

(植田地区 宗方校区)
賀来校区かた昼消防団
(植田地区 賀来校区)

【地域福祉向上】

ふじが丘東区自治会
(植田地区 東植田校区)

【日本一きれいなまちづくり】

月・木隊
(鶴崎地区 明治校区)

※会長名・代表者名などにつきましては、応募当時の方の名前を記載しております。

27年度協働のまちづくり大賞 テーマ:コミュニティの活性化

“人間”育み地域に潤いと 輝きを回復する元気発信活動

(佐賀関地区 木佐上校区)

木佐上コミュニティー 大石 進彦

地域の課題

活動を開始する以前、木佐上地区では、生活様式の変化とともに過疎化が少しずつ進み、近隣の絆も希薄となり、このままでは地域が崩壊するとの危機感が住民の間に生じていた。

取り組み内容

地区内の有志が地域づくりのソフト部門を担う「木佐上コミュニティー」を立ち上げ、ハード部門を担う木佐上連合区とともに地域の諸課題を解決・改善するために、「近隣との支え合いを深め、孤立化を無くす活動」、「多くの人が集まる場作りを企画し、地域間交流を図る活動」、「伝統ある良きものは護り育み、新しい未来を拓くものづくり活動やイベントの実施」に取り組んでいる。

【縦の木山春の遠足・山開き】

平成18年からスタートした新しい取り組みであるが、縦の木山が森林セラピーロードに認定されるなど、今では山開きの5月3日に毎年150人以上が集まる地区を代表する健康づくりの行事となっている。

【大分コガネクモ相撲選手権】

子どもと大人の世代間交流や、自然に触れ合うことで情緒豊かな人間性を創造する場として開催しており、今では多くの人が参加して楽しむ大イベントとなった。

【木佐上ふるさと運動会】

隔年で開催。子どもも大人も一つになって健康な汗をかくふれあいの一日となっている。

小学校が閉校となったことから、この運動会が地域スポーツの祭典として果たす役割もますます高まっていくと思われる。

【ふるさとんまつり・木佐上産業文化祭】

隔年で開催、地域を結ぶイベントとして、産業・文化発表の場として地区外からも多くの参加者が訪れ、来場者で木佐上が「ふくれる」2日間である。

産業文化祭5回目の節目には「赤ちゃん相撲」を企画し、健やかな赤ちゃんの成長を願う多くの協賛者もあり、現在は県内各地から赤ちゃん力士が集まる大イベントとなり盛大に開催している。

【新春木佐上ひょうたんまつり】

新春行事として多くの人が訪れる行事となっている。

活動の成果・今後の展望

地域の再生はまず人づくりから、次に人間がお互いに持っている「共に生きたい」という心を引き出し活かしていく作業が必要になると考えており、活動を始めた28年前から各地区を巡

回して座談会を重ねている。20年前から「むらづくり会費」を全地区民が収めるに至り、地区民は主体性を持って活動に参加している。

木佐上地区は世帯数の少ない小さな村であるが、このコミュニティ再生活動・活性化に県内でもいち早く取り組んだ結果、地域の元気を取り戻した。

「継続は力なり」というがこの活動が無ければ今の木佐上はなかったのではないかと思う。

今後に向けても活動の組織検討会議を重ね方向性を確認し、さらなる改善を検討しており、小学校の閉校を逆手にとつて若者が住む村づくり、高齢者も安心して住める環境作りにも一層知恵をしぼって取り組みたいと考えている。

縁があつて同じ地域に共に住むものとして、仲良く安心して喜びに生きることは誰もが心に持つ願いである。

しかし、一緒に暮らしていると仲良くとばかりは行かないこともある。価値観の相違や自分中心の生き方は強くなり世の中がますます住みづらくなっているように感じるが、そんな中だからこそ「ふれあい行事」を通して共に生きることを体感してもらえよう。今後も努めていきたい。



縦の木山春の遠足山開きの様子

27年度協働のまちづくり大賞 優秀賞

テーマ:世代間交流

子どもがつなぐ 町内会ふれあい広場

(大分中央地区 金池校区)

上野丘1丁目町内会 森田 豊久

地域の課題

上野ヶ丘1丁目町内会には、福寿会(老人会)、ふるさと会(男性ボランティア会)、ひまわり会(女性ボランティア会)、子ども会、松坂神社氏子総代会など年齢層の異なる多くの組織があるが、それぞれ単独に活動しているため組織間・世代間の交流は少なかつた。地域がひとつにまとまるためには世代を越えた結びつきが必要であり、そのためには、それぞれの組織が自覚と責任を持って相応の役割を担い活動する仕組みづくりが求められていた。

取り組み内容

それぞれの組織が協働する仕組みとして、世代間交流の場となる農園「ふれあい広場」の取り組みを始めた。

平成20年に市から遊休地を借用し「ふれあい広場」と命名し耕作を開始。水は裏手にある公民館から、農機は個人から借用するなど、今あるものを最大限に活用した。

しかし、農園ができたものの作業に関わるのはいつも同じ顔ぶれで、世代間交流には結びつかない状態が続いた。そこで、子どもたち中心の行事にすれば父母たちも必ず興味を示すと考え取り組みを改善、平成22年にふれあい広場の責任者に子ども会の会長を任命し、子ども会が中心となって町内に呼びかけるとともに、子ども達と植え付けや収穫作業を行った。

親子共々おぼつかない農作業であったが、他の組織の協力を受け、作業に取り組んでいった。

結果として、子どもの喜ぶ姿を見るために、子ども会やふるさと会が組織を越えて協力し、それにより新たな交流が生まれるという、良い流れが住民間に生まれたかと思っている。

【(夏) カレーで交流！昼食会】

収穫したタマネギ、ニンジン、ジャガイモでカレーライスの昼食会を行う。調理は子ども会の父母が行い、その間、子ども達はふるさと会・ひまわり会と竹馬・竹とんぼ・お手玉を製作し、昔遊びを体験した。

【(秋) 収穫！ほくほく蒸かしイモ】

サツマイモの収穫では、蒸かしイモにして子どもからお年寄りまで一堂にして秋の実りを味わった。

残りのイモはお土産に、子ども達は大きな袋を両手に持って満面の笑みを浮かべて帰っていった。

【(冬) 餅つき大会・子どもが大好き昔遊び】

これまで年中行事であった餅つき大会は、ふれあい広場が出来てからは子どもを中心に賑わいを見せた。

子ども会からの要望で、餅つき大会のときも竹馬や竹とんぼで楽しく遊ぶことが定番となった。

活動の成果・今後の展望

ふれあい広場での活動により、住民は外で人に出会うと気軽に挨拶を交わせるようになり、広場の話をするとき子どもも大人もみんなが笑顔になっている。

子ども達はカレーライスや蒸かしイモ、餅つきを楽しみにしており、ふるさと会をはじめとする大人たちも予め遊具の準備に余念のない状況であり、世代間の交流が深まって来たことを実感している。

また、防災訓練、一斉ゴミ拾い、敬老会、体育祭など町内会行事への参加者も年々増加してきており、町内会としての一体感が高まってきているのを感じており、この取り組みが始まって

からふるさと会にも僅かながら30代・40代の若者が加入してきている。今後の課題は、どの地域でも共通することであるが、高齢化の進展に伴う各組織の後継者対策である。

先達より継承されてきた素晴らしい組織や伝統が衰退することなく次世代に続くよう、新たな仕組みづくり、施策を考え着実に成果が上がるよう弛まぬ努力をすることを心がけ精進を重ねていきたい。



さつまいも収穫の様子



27年度協働のまちづくり大賞 優秀賞 テーマ:世代間交流

みんなでわいわいまちづくり

(城東原川地区 東大分校区)

NPO法人わいわい夢クラブ 吉田 和光

地域の課題

地域では核家族や高齢者の独り暮らし世帯が増加し、またマンション・アパート等への転入者の増加に伴い、新旧住民のコミュニケーションの場を作る必要があった。

また、伝統行事や地区行事の担い手の確保や多様化する地域住民のニーズへの対応など、多様な課題が存在しており、これらに対して自治会をはじめ校区内にある各組織が連携協力して解決していく必要があった。

取り組み内容

スポーツ・文化活動による多世代交流、青少年の健全育成、高齢者の健康の保持増進と基礎体力アップを主な事業内容として、総合型地域スポーツクラブ「わいわい夢クラブ」を平成19年4月に設立、地域行事にも積極的に関

わり、自治会をはじめとした校区内にある各組織との協働により地域の一体感を醸成している。

また、自治会や公民館、市民活動団体等の各種団体や住民で組織する東大分校区まちづくり協議会（平成27年6月設立）の事務局として構成団体のコーディネーター役と自立したまちづくり運営のための支援を行い、一括交付金を活用した各自治会が行う地域活性化事業等のサポートをしている。

広報については、限られた予算の中で、広く地域住民に周知広報することは難しいため、ホームページやフェイスブック等のSNSを活用したタイムリーな情報発信をしている。

【活動状況】

校区内の幼稚園・小中学校とも交流や連携をしている。（参加者 670人）

子ども対象のスポーツ活動（バレーボール、スポンジボールテニス、キッズダンス、和太鼓等）を通して子ども

にスポーツの楽しさや相手への思いや
りを伝え、青少年の健全育成を図って
いる。(参加者3, 970人)

高齢者の軽スポーツで健康増進や仲
間づくりを推進している。

(参加者1, 260人)

文化活動(絵手紙、書道等)で運動
の苦手な人も交流の輪を広げている。

(参加者1, 640人)

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

○公民館や小学校等の公共施設を中心
に有効活用したことで、地域住民が集
まりやすく新たな交流の場が生まれた。
○高齢者の寄り所づくり(教室、集い、
お出かけイベント等)を企画し、引き
こもりがちな高齢者が生きがいや楽し
みを見つけ、明るい笑い声が絶えない
健康的な活動となっている。

○スポーツ等の多世代交流をした結果、
高齢者から子ども達(孫)へ指導や見
守りの意識を高めることができた。

○まちづくり協議会の設立により、自
治会をはじめ地域の諸団体間の理解が
一層深まり、地域の課題に対して連携
協力して解決していく体制が整うと
もに、一括交付金の活用により、より
自立したまちづくり活動が円滑なもの
となった。

当初は、今までにない取り組みで浸
透するまでに時間がかかったが、信念
と情熱で地道に活動してきたことで地
域の核となるクラブとなった。

地域の諸課題に対して、従来型の行
政依存体質ではなく、地域活動は地域
全体で支えあい、地域の未来は地域住
民の手でつくりだす機運が高まったこ
とで、今後のまちづくりへの道筋が見
えてきた。

【今後の展望】

地域で暮らし、地域で活動するため
に、地域住民の理解や、自治会をはじ
め公民館等の諸団体への支援連携に全
面的に協力することを惜しまない。

地域は人と人の繋がりで成り立って
いるので、楽しく参加し、交流ができ
る身近な場所を提供できるよう努めて
いきたい。



活動の様子



27年度協働のまちづくり大賞 優秀賞 テーマ: 安心安全のまちづくり

減災のまちづくりをめざして

(南大分地区 城南校区) 城南南町防災会 岡村 晰

地域の課題

「いつでもどこでもやってくる」災害に対し、自地区内でも発生時の被害を最小限に抑える「減災」に向けての取り組みや、日頃からの備えを行うことが重要になっていった。

そこで、いざというときに行動できるように、町内の防災意識を高め、減災に向けて今何をすればいいのかを防災会を中心に具体的に考え、町内への呼びかけを行うこととした。

取り組み内容

「自分たちの地域は自分たちで守ろう」を合言葉に隣近所の人たちが助け合う共助の精神のもと、4つの柱で減災のまちづくり・安心安全のまちづくりに取り組んでいる。

【防災啓発活動】

防災通信を定期的に発行し防災に係る必要な情報を全世帯に周知、専用のファイルを配布し保存してもらい1冊の冊子として活用できるようにしている。

防災マップ、津波対策地図についても防災会で作成し、全世帯に配布している。

また、町内から募集した約100点の防災標語応募の優秀作30点をパネルにして町内各所に掲示しているほか、毎月2回の自治会会報で順次紹介し住民の防災意識・参画意識を高めている。

【防災訓練】

町内に16ある組ごとに防災訓練を実施、自宅から避難場所への避難、災害弱者を近隣住民が簡易担架で搬送、参加者全員による簡易担架作成訓練、非常持ち出し品の確認、避難時服装の点検、炊き出し訓練などを行っている。

防災訓練の実施に際しては実施2か月前から準備を開始している。

実施2か月前から毎月実施してい

る町内一斉清掃の終了後、全世帯に集まってもらい非常時持ち出し品リストを配布し各自本番までに準備を行う。

1か月前になったら再び一斉清掃のあとに集まってもらい実施計画等詳細な説明を行っている。

訓練未実施の組も他の組が実施する訓練を見学し、自分の組が実施する際の参考にすることで各組の訓練の内容が次第に良くなってきている。

24年度までは全町単位で訓練を実施していたが、25年度から組単位に切り替えたことにより、組内のほぼ全世帯が参加するようになり、訓練の効果や住民の防災意識が飛躍的に向上した。

【防災機材の整備】

自家発電機等の機材の整備のほか、手作り担架や自作の防災頭巾なども整

備し防災訓練の際に参加者に使用方法を説明している。

【防犯灯の整備】

町内51の防犯灯を3年計画でLED化し、安心安全な環境を整備することが出来た。

活動の成果・今後の展望

大きな成果として、防災訓練の参加者が100%近くに向上したことがあげられる。

これは住民の防災意識が向上したことの表れと考えられる。

非常持ち出し品についても、中身の濃淡はあるものの全世帯が準備している。

防災頭巾は座布団を2枚縫い合わせたものや、バスタオルに新聞紙を入れたものなど各自が工夫を凝らして準備

をしており、「自分の命は自分で守る」を率先して実践するようになってい

このように住民の防災に関する意識が変わってきたのも、これまで防災会が取り組んできた啓発活動の積み重ねの成果であると考えている。

今後は地区内にある官舎や社宅等の集合住宅を対象とした防災対策も必要であり、施設管理者等と協力し減災に向けての取り組みを推進していきたい。



防災訓練の様子



27年度協働のまちづくり大賞 優秀賞 テーマ: 安心安全のまちづくり

各種団体と協働で 安心安全な地域づくり

(鶴崎地区 松岡校区)
松岡校区自治会連絡協議会 宮本 榮紀

地域の課題

松岡校区の人口は公園通り、京が丘団地の新設に伴い10年間で1.6倍の9,300名となり、小学校児童も急激に増加して1,000名を超えた。

しかし通学路の状況は以前そのままであり、通学時の交通事故の懸念や、防犯対策を求める声が父兄等から多く出されており、何らかの対策が必要であった。

取り組み内容

平成26年5月から松岡校区自治会連絡協議会(自治会協)が中心となつて、協働による課題解決に取り組むため情報収集や関係団体等と協議を開始。その中で安心安全な地域づくりを校区全体の課題として捉え、自治会協が主体となり小学校、中学校、青少年健全育成連絡協議会(青少協)及び関係

自治会等と連携し、行政との協働により問題解決を図ってきた。

【小学児童通学時の安全対策】

児童を多く抱える自治会や小学校と小学生の通学の安全について協議したところ、通学路に危険箇所があることが判明したことから、路側部に緑色の表示(グリーンベルト)を設置することを市と協議して、26年度から一部実施した。以降も順次残り区間を実施していくことで合意している。

更に、歩道飛び出し防止柵の設置についても、県が設置することで合意しており、通学の安全が図られることとなった。

また、運転者の注意を喚起するため啓発看板も自治会の協力を得て各所に設置した。



設置したグリーンベルト

【片島松岡バイパスの歩道照明・防犯灯設置】

この道路は中学校の通学路に指定されているが周囲には照明が無いことから、中学校と協議し市関係課と合同で現地調査を実施した結果、27年度から既設電柱に歩道照明を設置することとなった。

また、防犯灯についても700mに渡り未設置であったことから、関係機関と協議した結果、当該区間全域に電柱を敷設し防犯灯を設置することとなった。



敷設した防犯灯

【不審者対策】

26年度に不審者による声掛け事例が校区内で6件発生したことから、自治会協の会議に松岡交番の巡査も出席し、各自自治会に注意を喚起した。

また、犯罪の無い地区にするためには、住民の監視の眼を多くすることが重要と考え、防犯情報を普段から住民と共有するための方策を講じるとともに、パトロールの際に使用する青パトの導入を前向きに検討中である。

活動の成果・今後の展望

通学路の安全対策については、現段階で問題視しているものは28年度末までに解決する見通しが出来た。

今後取り組む事項についても校区で出来ることは校区が担当し、必要に応じて行政の協力を得ながら実現に向け努力していきたい。

また、今回の活動の直接的目的は「通学路における事故・犯罪の未然防止」

であるが、自治会協、関係自治会、青少協、及び学校等の各種団体が連携することにより、住民の意向や地域の課題が共有され、かつ成果を出すことにより、行動する（動く）ことの重要性や各種団体が繋がることの重要性について、関係者の理解が進むという効果を生み出すこととなった。

公園通り、京が丘地区の住民は、松岡全住民の6割を占めており、校区の安心安全な地域づくりを進めていくにあたって重要な担い手である。特に子供が多いため、父兄は通学路の安全対策等、子供の育成環境について関心が強いと推定される。

地域課題に校区全体として取り組むことにより、新興地区住民と旧地元住民の信頼・連携強化が図れ、将来の松岡を支える活動の原動力になることを期待したい。

27年度協働のまちづくり大賞 優秀賞 テーマ:安心安全のまちづくり

賀来校区かた昼消防団

(植田地区 賀来校区) 賀来校区かた昼消防団 秦 和恵

地域の課題

賀来校区は校区全体でみると少子高齢化が進行しており、地域の安心安全を守る消防団員の高齢化、新入団員不足が生じていた。

そんな中、平成9年に台風が大分市に上陸、地域内を流れる尼ヶ瀬川が氾濫し住宅が床上浸水するなど甚大な被害をもたらした。

これをうけて地域防災の重要性を再認識したが、取り組みを開始するきっかけとなった。

取り組み内容

消防団の高齢化・新入団不足に歯止めをかけるとともに、地域防災の必要性を青少年に理解してもらい未来の消防団員を育成することを目的に、自治会・中学校・消防団が連携して「賀来校区かた昼消防団」を発足させた。

※「かた昼」とは大分弁で半日のこと。

賀来中学校が教育方針として「地域との協力」をかかげ、多様な交流活動を通して思いやりや責任感のある心の育成を目指していたことから、学校側も全面的に協力、全校生徒に呼びかけを行ってくれた。

呼びかけに応じて自主的に集まった地元の賀来中学校（19年度より賀来小中学校）の1・2年生24人を自治会長が「かた昼消防団員」として任命した。

現在は8班制で、賀来小中学校の5年生から8年生の男女7〜8人で班を構成し、59名が日曜日の半日活动している。

毎年、秋の火災予防運動が行われる11月に任命式を行い、規律訓練やホースを使つての放水訓練、消防団車両に乗り込んでの広報活動、心肺蘇生法等の救命講習、炊き出し訓練などを消防団員の指導を受けながら取り組んでいる。

当初はホースを触るのも初めてで何もかもが分からない、号令をかけても動きが揃わない状態だった児童・生徒が、団員の説明を熱心に聞き、時には大声で注意されながらも何とか自分のものにしようと繰り返し訓練に取り組みという姿勢が見られる。

この活動は「かた昼消防団」の児童・生徒たちにとっては消防団員や地域の人たちとの連帯感・信頼感を深めるとともに、集団活動を通じて社会生活のルールを学び、思いやりや責任感を育成し、郷土愛や地域社会の一員としての自覚を深める場にもなっている。

2月には消防団員と一緒に、5月には自治会と合同で河川敷の清掃活動を行うなど地域活動にも積極的に参加している。



放水訓練の様子

活動の成果・今後の展望

「かた昼消防団」を体験した児童・生徒の中からは、将来は消防団に入団したいという感想を持つ生徒も多く、実際に入団した生徒もおり活動の成果が少しずつ表れている。

また、児童・生徒と消防団員をはじめとする地域の人たち間で信頼関係が生まれ、活動の場以外でも挨拶が交わされるようになるなど地域の活性化にも効果があった。

これからも地域に密着した活動として市民の安心安全を守るために、また、児童・生徒の健全育成の場としてこれからも活動を継続していきたい。



清掃活動の様子



規律訓練の様子

27年度協働のまちづくり大賞 優秀賞 テーマ:地域福祉向上

高齢化を幸齢・長寿の街に

(植田地区 東植田校区)
ふじが丘東区自治会 安部 信生

地域の課題

団地が造成されて40年が経過し、住民の高齢化が進行、高齢化率は30%を超えている。

自治区内には、一人でごみ出しをすることもできない高齢者も出てきており、民生委員だけでは目が届かない状況となっていた。

そこで、自治会としては老人に優しく住みやすい・心配なく年をとれる自治会づくりに重点的に取り組むこととした。

取り組み内容

自治会独自の取り組みとして、「福祉協力員」を創設し、独居高齢者の見守り、民生委員の手助けをしてもらっている。

「福祉協力員」は現在5名おり、自地区内に30軒ある独居高齢者宅を分担して受け持ち、見守り訪問や炊き出しの配達、自治会長への報告などを行っている。

また、「ふれあいパトロール」制度を創設し、6名3組のメンバーが毎週火曜日、可燃ごみの日に合せて独居高齢者宅を訪問、ごみを捨ててあげるだけではなく要望を聞くなど、対話の中で健康状態を確認するといった取り組みを行っている。

この他にも老人会の行事や卓球・グラウンドゴルフ・ペタンクなどのスポーツ等の機会があればメンバーからも参加の声掛けを行い、引きこもりがちの高齢者にも参加を促し、「健康寿命を伸ばしましょう」と訴えている。

自治会として福祉に重点的に取り組むため自治会組織の見直しを行った。

まず会長・副会長2名・会計の3役の手当てを減額、顧問・スポーツ・衛生・保健等の役職の在り方を見直すなどして「福祉協力員」の手当てを確保した。

自治会費の値上げで対応することも検討したが、自治会は住民の幸せのために活動するという考えを徹底するため見送った。

併せて女性と若い人材の登用に尽力し、副会長に40代の男女、会計には50代を登用した。

民生委員と自治会三役は特に連携を取るようにしており、共通認識を持つようにしている。

活動の成果・今後の展望

現在は「ふれあいパトロール」の訪問を心待ちにしている高齢者も多く、自治会活動への参加者、特にグラウンドゴルフや誕生日会への参加者が取り組みを始める前に比べると増加している。

地域住民の協力もあり組織体制は整ってきたと思われるが、28年度には高齢化率が45%を超えることも想定されつつあるので、今後も試行錯誤を行いながら取り組みを継続していきたい。

27年度協働のまちづくり大賞 奨励賞 テーマ:コミュニティの活性化

自主財源の確保で コミュニティ活性化を図ろう

(鶴崎地区 松岡校区)
真萱自治会 吉田 房雄

地域の課題

当時真萱自治会では、山車の収納庫の新築移転、道路の拡幅工事などの大きな出費を伴う事業が続いていて、このままでは自治会の預金は数年間のうちに底をついてしまうと危惧していた。

取り組み内容

平成25年度の自治会の総会で住民から「公民館の屋根に太陽光発電システム装置を設置して、発電した電力を九州電力に売電して得る利益を活動費に充てるようにしてはどうか」と言う意見があった。

「太陽光発電」を設置するか否かで自治会内で討議を重ねたが、「自治会が営利目的の事業を行っていいのか」、

「装置が故障した時の保証などが心配だ」の声が多く出た。

また電力買取制度を実施しているドイツで制度の見直しを検討されている等の不安材料も出るなど、役員の間でも意見が分かれていた。

しかし、自治会では政府が発表している固定買取制度と業者の20年保証を信用して「太陽光発電」を設置することを決め、「太陽光発電実行委員会」を立ち上げた。

行政に、他の自治会で「太陽光発電」を設置している自治会があるのか相談したところ、数は少ないが設置している自治会があるとのことだったので、設置している自治会長に電話をして内容の聞き取り調査を行った。

この調査により、自分たちの自治会にも設置ができるという思いが強くなった。

後日、住民説明会を開き、見積内容、

メーカー保証の内容、発電シミュレーション等のデータや、自治会内でこれから予想される大きい出費など、自治会が持っている資料はすべてオープンにし、言葉だけでは分かりにくいので、出来るだけ図表にしてプロジェクトを利用したプレゼンテーションを行った。

説明会に参加した人からは賛否両論白熱した意見が続出したが、結果として住民からは理解を得ることができた。

最終的には26年3月の自治会総会に諮ることとなり、この場でも認可申請や日照時間、メーカーの選定、メンテナンス費用など多数の質問・意見が出たが丁寧な説明をする中理解を得ることができ、原案どおり承認された。

これを受けて26年4月に工事着手、同年5月に完成し発電を開始した。

活動の成果・今後の展望

設置後の発電量はシミュレーションよりも多めの発電で、費用は少し早く回収できるのではないかと期待している。

この売電による利益は、若い人世代が将来、真萱地区を更に活性化してもらうための資金として使ってもらいたいと考えているので、20年先までは支えないようにしたいと考えている。

また、自治会では9月から毎月廃品回収を行い、少しでも活動費を増やす努力をしている。

これらの活動費を有効に使い、各種団体と協働して地域コミュニティの活性化を図って行きたい。



27年度協働のまちづくり大賞 奨励賞 テーマ:安心安全のまちづくり

上宗方子ども見守り ボランティア

(植田地区 宗方自治会)
上宗方自治会 安東 幸吉

地域の課題

平成9年の神戸連続児童殺傷事件、平成13年の付属池田小事件など、児童に関する重大事件が発生するたび、上宗方の子どもたちは大丈夫であろうかと、自治会の会議や住民が集まる席でよく話題になっていた。

自治会に何ができるのかを考えているうちに、ボランティアによる見守りをする事によって、下校時に交通事故や不審者等から子どもたちを守ることに有効であると考え、宗方小学校と協議をし、児童生徒の見守りを行うようになった。

取り組み内容

当初は、通学路においての見守りと、交差点での交通指導を行っていた。

その後、平成22年よりはじまった、「あいさつOITA+1運動」により、「おかえり」及びプラス「ひとこと」という運動にも取り組んでいる。

登下校道路の管理等については、危険箇所について関連部署へ通報をして整備等を行うなどの依頼するとともに、注意喚起の看板等設置を行っている。

活動は全てボランティアであるが、多くの協力者のもと、当番表を作成し、行っている。

小学校とも連携し、4半期ごとに学校スケジュールを把握するとともに、突発的な事項については、小学校の担当者へ連絡できる体制を構築している。併せて情報共有を図るため、自治会役員間で携帯電話のメールアドレスの



活動の様子

登録しており、一斉送信等により、瞬時に情報が伝達できるようにしている。

また、事故対応として、「AED」を公民館に設置し、訓練を実施している。自治会広報車を活用し、「不審者の情報」「地域での空き巣等情報」を共有できるよう広報活動を行っている。

活動の成果・今後の展望

ボランティア協力者が、ウインドブレーカー・帽子・タスキ等を着用することにより、「より見える」見守りができるようになった。

あいさつ運動を継続することにより、最初はいいさつしても、かえさない子やニコリともしなかった子も、あいさつするようになったり、ニコっとして頭を下げるようになったことが喜ばしい。

また、あいさつ以外にも、短い会話であるが、学校での様子等を話す子も出てきており、家族や学校の先生以外の大人と接する機会が少ない子どもも、大人と接する機会が増え、「ことばのキヤッチボール」ができるようになり、我々ボランティア（子どもたちにとっては、おじいちゃん・おばあちゃん世代）との交流により、自治会主催のまつりやななせの火群まつりといった行事などでも、世代をまたいで活発な交流が図れるようになった。

最近では、ボランティアの高齢化が進んでいることから、若手ボランティアへの引き継ぎを課題としているが、これからも活動を継続していきたい。



活動の様子

27年度協働のまちづくり大賞 奨励賞 テーマ：日本一きれいなまちづくり

環境美化活動（月・木隊）

（鶴崎地区 明治校区）
月・木隊 牧 久美

地域の課題

健康づくりのためウオーキングを始めたところ、あまりにも地域の道路にゴミ（特にタバコの吸い殻）が落ちていくことに気づき、きれいな町にする事を目標に23年度よりゴミ拾い活動を開始した。

取り組み内容

正月三が日と雨天の日を除いて毎週月曜日と木曜日の可燃物収集日に合わせ、早朝1時間、健康づくりのためのウオーキングをしながら道路のゴミ拾いなど清掃活動を行っている。

ここ2年くらいは歩道の草むしりや花壇の手入れも行っている。

毎回、ごみ袋がいっぱいになる程、ゴミが集まっている。

また、清掃活動終了後の6時30分より健康ラジオ体操を行っている。

挫けそうな時期もあったが、皆で声を掛け合い励まし合って続けてきており、今年で6年目に入っている。
最高齢78歳の方もいるが、まだまだ元気で頑張っている。

活動の成果・今後の展望

拾えども拾えどもゴミが落ちていくが、拾った後に道路がきれいになるのは気持ちのいいものである。

歩行者の方達から「ご苦労様、ありがとうございます」と声をかけられると、嬉しい気持ちになり励ましになる。

これからもゴミを捨てる人がいなくなることを願い、健康づくりと環境美化活動として、ゴミ拾いを粘り強く続けていく。



メンバーの皆さん

平成27年度協働のまちづくり大賞表彰式



問い合わせ先

大分市 市民部 市民協働推進課

電話：097-537-7251